

# 小学校物語教材における額縁構造と後額の意味

——「世界一美しいぼくの村」「桃花片」の分析を通して——

水野 稚菜

## 1 本稿の目的

小・中学校の文学教材をめぐるジャンルの中に「額縁構造」なる特徴を持つ一連の作品群がある。額縁構造とは、甲斐(1989)が述べるように「三部の構成の物語で説明すると、第一部と第三部の物語が外枠としての額縁をなし、第二部がうちの絵」になるような特徴を持つもので、安藤(2015)はそれに加え、「一般に時制が、『現在』で進行しているが、途中で『過去』に遡り、また『現在』に戻ってくる構成を指す」とも述べている。すなわち、この作品群は三部構成による構造を有し、第一部と第三部が「現在時制」で進行し、間に挟まれる第二部が「過去時制」に遡るという特徴を有することになる。

一般的に額縁構造はこうした特徴を持つために、第一部を「前額」、第二部を「絵画」、そして第三部を「後額」と呼びならわすことが多いが、作品によっては額の一部が欠損することがあるために、第一部と第三部の両方があるものを「両額構造」、第一部と第三部のどちらかが欠損しているものを「片額構造」という。こうした構造上の特徴に加え、第一部と第三部の現在時制で進行する両額の部分では、意味的な特徴として大きな変容が必ず見られることもまた額縁構造特有の現象として指摘さ

れている(須貝2001)。

本構造を有する作品群の精緻な研究には、上述のような先行研究の他、倉井(2018)による修士論文もあり、倉井(2018)はそこで以下のようなことを額縁構造に見られる特徴として詳細に検討している。額縁部分に意味的特徴としての「大きな変容」が見られることから、倉井(2018)は「額縁構造」をもった物語教材において、『変容』が書かれている『現在』部分に重きが置かれている」と考察している。加えて、「過去」部分については、「『変容』と関係のある出来事、つまり『原因』や『きっかけ』となる出来事が書かれている」と示している。したがって、倉井(2018)は、第一部と第三部の「現在時制」と、間に挟まれる第二部である「過去時制」部分の関係性について指摘している。また、変容が何かを読み取るためには、「前額」と「後額」の「額縁部分の内容」の情報量が十分にあること、「額縁部分」と「過去部分」の出来事に「時間の飛躍」が書かれていることも重要としている。

ところで、稿者は小・中学校の文学教材に興味があり、特にある特有の構造を持つような作品群の検討を学校支援プロジェクトの研究課題に挙げ、およそ二年間をかけてその授業化に取

り組んできた。しかし、授業化に向けた精緻な作品研究を行う中で、まだ明らかにされていない額縁構造特有のポイントがあるのではないかという問題意識を持つようになった。本稿は、こうした意識を前提とし、では先行研究で明らかにされてこなかったジャンル特有のポイントとは何であるのかを、実際の額縁構造を持つ教材を分析することで明らかにしてみたい。また、そのことが授業構成上、どのような作品読解の視点として有効に機能するのかを具体的な作品内容に寄りつつ考察する。

## 2 額縁構造の特徴

### 2.1 構造上の特徴

甲斐 (1989) は額縁構造について「三部構成の物語で説明すると、第一部と第三部の物語が外枠としての額縁をなし、第二部がうち絵に該当するからである。」と述べている。加えて、3つの部について甲斐 (1989) はそれぞれを「第一部『現在の世界』、第二部『回想の世界』、第三部『現在の世界』」と名付けている。安藤 (2015) は「一般に時制が、『現在』で進行しているが、途中で『過去』に遡り、また『現在』に戻ってくる構成を指す。」としている。安藤 (2015) は「過去」「甲斐 (1989) は第二部を過去を振り返る意味である『回想』と述べていることから、額縁構造内で起こる時間変化とは額縁をなす『現在』と額縁の中に飾られる絵の位置に例えられる『過去』への反復に限定される。すなわち、額縁構造を持つ作品群は、三部構成による構造を有しており、第一部と第三部が『現在時制』、間に挟まれる第二部が『過去時制』に遡るといふ時間変化を伴う

文章であると定義できる。

一般的に、額縁構造は三部構造をとり、第一部を「前額」、第二部を「絵画」、第三部を「後額」と呼ぶ。甲斐 (1989) が額縁構造について定義する際、「三部構成の物語で説明すると」と述べているように、すべての額縁構造が三部構成になっているわけではない。時間変化が「現在」と「過去」への反復に限定されているだけであるため、物語によっては「現在—過去」または「過去—現在」といった額縁部分が欠けた構成の場合がある。このように第一部と第三部どちらかが欠けている構造を「片額構造」、両方あるものを「両額構造」という。

以上のことから、額縁構造は図1のように表せる。

### 2.2 内容的特徴

構造上の特徴だけでなく、「前額」と「後額」、「絵画」といった部分に書かれている内容の関係についても額縁構造の特徴がみられる。

須貝 (2001) は「額縁構造」というならば、その最初の一文と最後の一文の対応には、非対称の関係を見出すことができ、

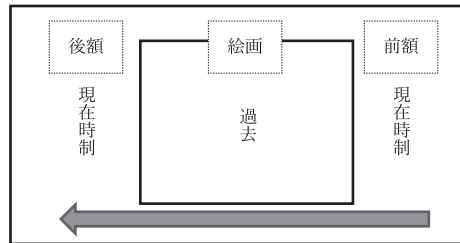


図1 額縁構造

歪みが生じていることを同時に問題としなければならぬ。」と述べている。これは、最初の一文が含まれる「前額」と最後の一文が含まれる「後額」の間には、何らかの、物語の意味的に大きな変容があることを示している。

また、倉井(2018)は「額縁構造の特徴として、Gerard Genette(1972)の主張する『語りの水準』をあげることができぬ。」と述べている。「語りの水準」とは、作中人物の「話者」がどこから物語を語っているか示したものであり、作者が物語を執筆する「物語世界外」、物語として語られる出来事である「物語世界」、物語世界の中で語られる出来事である「メタ物語世界」の三つがある(Genette,1972)。額縁構造で言うならば、現在時制である第一部、第三部が「物語世界」、その世界から回想される過去時制の第二部が「メタ物語世界」と定義できる。「物語世界」と「メタ物語世界」を持つ三つの関係の内、第一のタイプが、「額縁構造」に当てはまると指摘されている(倉井,2018)。

第一のタイプ……メタ物語世界の出来事と物語世界の出来事とを直接的にむすびつける因果関係で、それが第二次物語言説(注:メタ物語世界のこと)に、言わば説明的機能が付与する。(注は倉井)

「物語世界」の出来事と「メタ物語世界」の出来事が直接的に因果関係をもち、メタ物語世界に説明的機能を持たせることから、「前額」から「後額」にかけて起こる「変容」と、過去

時制の「絵画」には直接的な因果関係を見出すことができ、「絵画」には「変容」に対する説明的機能である「きっかけ・原因」が書かれているといえる。

したがって、額縁構造には、現在時制である「前額」、「後額」を比較することで「変容」を読み取ることができ、その変容をもとに、過去時制の「絵画」から変容の「きっかけ・原因」にあたる部分へ注目させる特徴がある。

## 2.3 類型

額縁構造は、必ずしも三部構成である「両額構造」とは限らない。前額や後額が欠けた「片額構造」の場合がある。後額が欠けた「前型」、前額が欠けた「後型」と呼びならわすことが多い。倉井(2018)がまとめた額型を整理すると、以下ようになる。

「両額構造」：両方の額縁部分が存在し、「前額―絵画―後額」という最もオーソドックスな型である。両方の額縁部分が書かれているため、変容の前後を比較しやすい。

「前型」：「前額―絵画」となっており、後額が欠けている。「変容前」や「きっかけ・原因」から「変容後」を考える必要がある。教材の読み取りが十分におこなえないと多様な解釈が生まれやすく、「両額構造」にくらべ難しい教材である。

「後型」：「絵画―後額」となっており、前額が欠けている。「変容前」がなく、「絵画」に書かれている「きっかけ・原因」から「変容」を考えなければならぬ。「後額」につ

いて十分な読み取りが行えないと「変容」そのものに気づかない可能性があり、とても難しい教材である。

また、以上の三種類の型の特徴について「情報量」と「出来事の時間の変化」が重要な要素と指摘されている(倉井,2018)。情報量とは、前額や後額といった額縁部分に「変容するものがあるのか」明確に書かれているかというものである。これが不十分であると、「変容」から推測する「きっかけ・原因」、変容との因果関係を把握することが困難になる。「出来事の時間の変化」とは、「額縁部分」と「絵画」の間に「時間の飛躍」が示されているかというものである。これが不十分であると「額縁構造」とは別の種類の構造をとる物語教材の可能性を考えなければならなくなる。したがって、額縁構造の持つ類型自体には、読み取りにあたり難易度や特徴が存在する。それに加え、「情報量」と「出来事の時間の変化」という要素が物語教材の中に含まれているかによっても難易度や特徴が変化することがある。

### 3 分析作品の梗概

#### 「世界一美しいほくの村」

本教材は、アフガニスタンの村パグマンに住む少年ヤモの幸せな一日を描きながら、日常の中に見え隠れする戦争の悲惨さを感じさせる物語である。

主人公はアフガニスタンのパグマンという村に住む、小さな男の子ヤモである。アフガニスタンは夏になれば果物が豊かに

実る美しい自然がいつばいの国である一方で、そこでは何年も民族同士の戦争が続いている。戦争は国中に広がり、ヤモの兄は兵隊となって戦いに向かう。パグマンではあんずやすもやさくらんぼが取れ、ヤモは兄に代わり、父親とろぼのボンパーと共に初めて町へ果物を売りに行く。

町は豆売りのおじさんが大声を張り上げ、羊の市なども立ち、にぎやかな声があふれている。すももを売る父親と手分けをして、ヤモはボンパーと共にさくらんぼを売りに町を回り、色とりどりの小さな店が所せましと並ぶ中にある屋根付きのバザールにたどり着く。はじめはさくらんぼを売るため声をあげるヤモに誰も見向きもしなかったが、小さな女の子や、戦争に行き足をなくしたおじさんがさくらんぼを買ってくれたことでヤモのさくらんぼは飛ぶように売れる。

ヤモはさくらんぼを売りきると父親のもとへ戻り、休憩を兼ねて食堂へ昼食を食べに行く。ヤモは食堂でさくらんぼを売る際に出会った足をなくしたおじさんの話を父親に話している。二人の話を聞いていたおじさんに話しかけられる。父親とおじさんが「南の方の戦いがひどくなっている」と話しているのを聞くと、ヤモは兄はきつと元気に帰ってくると信じながらも不安を感じる。不安そうなヤモを見て、父親は「残りのすももを売り切った後、びっくりする場所に行く」とヤモに告げる。すももを全て売り切ると、ヤモたちは羊の市場に向かい、もうけたお金を全部使って、真っ白な子羊を買う。ヤモは大喜びで村に戻ると、子羊に「バハール(春)」という名前をつけ、子羊を兄に紹介したいと思い、兄が返ってくるのを待ち遠しく

感じる。しかし、その年の冬、村は戦争で破壊されてしまった。

### 「桃花片」

本教材は、楊と楊の父親との親子関係を描きながら、仕事に対する情熱や芸術に対する多様な価値観について深く考えさせる物語である。

陶器を作ることを生業とする年老いた老人の楊が主人公である。楊は、薄暗い仕事場でつぼや皿を作っている。

幼い頃の楊は、父親の仕事場で陶工のまねごとや土で形を作ったばかりの皿や茶わんを干し台に並べる手伝いをしていった。幼い楊にとつて、父親が素焼きのうつわにうわぐすりをかけ模様を書いたり、ひとかたまりの土から小さな人形が作りだされたりする光景は面白く不思議なものだった。

楊の父親は、髪の毛がちりちりと燃えることもいとわずお茶の色に映りの良い青い茶碗を焼くためにかまから焼き物運び出すほど、ふだん使う陶磁器に限りない愛情を注ぎ込んでいた。不意に、楊はそのふだん使う焼き物ばかり焼いている父親の姿をばかばかしく思い、もつといいものを焼いてみたくなのかと思うようになった。楊は焼き物を鑑賞できることが本当の値打ちであると考えようになり、自由にろくろをひけるようになると、父親にできないことを今に自分がすると考えるようになった。

若者に成長すると楊には陶工の才能があることがわかり、ろくろ技術は名人といってもいいほどのものとなった。しかし、父親は「豊かさとなごやかさからは程遠く、自分を押し出しす

ぎている」として手放してほめることはなかった。その後、楊は焼く技術を学ぶが、自身の腕が父親の腕には遠く及ばないことを知る。楊は心にながう焼き物でなければ片はしから割ってしまう、その息子の姿を父親は暗い気持ちで眺めていた。

父親の死後、楊も六十歳を過ぎた頃、人々から「名人」と呼ばれるようになった。一時は満ち足りた日々を送っていたが、しだいに心の中ではそれを疑う気持ちが始まる。子どもに心の中でそれを疑う気持ちが頭をもたげはじめる。子どもに絵付けした素朴なかざり皿と白磁のつるくびにかなうものをまだ作れていないように感じていた。

その後、すっかり年老いた楊は毎日ろくろを回し、残された命の火を掻き立てるようにかまに向かっていた。ある日、名器とうわさされる桃花片の水滴に出会う。楊が魅せられたその器は、父親の作であった。

### 4 「世界一美しいぼくの村」…後額構造

4.1 内容的特徴  
「世界一美しいぼくの村」は、大きく2つに内容を分けることができる。ひとつは、物語末部のヤモの住む村の現状について書かれた段落である。この段落は以下の一文である。

その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません。

結末としては「村がすでない」という状態が読み取れる。そのため、これを変容後の姿とすると、変容前は「村があった」という推測が立つ。そのため、「村がなくなってしまう」と

ということが、物語の意味的に大きな変容であると考えられる。もうひとつは、主人公のヤモが父親と共に町へ行き、再び村へ帰ってくるまでの一日が描かれている段落群である。ここでは、度々アフガニスタンで戦争が起きているとわかる描写がなされている。ヤモの兄のハルーンが出兵している描写や、さくらんぼを買ってくれる足をなくしたおじさんの登場、食堂での南の方の戦いがひどくなっているという話などが見られ、その度にヤモは不安を感じる。村がなくなるというマイナスを感じさせる「きっかけ・原因」となる描写は戦争が起きている描写のみである。すなわち、村がなくなる「きっかけ・原因」は戦争であると読み取ることができる。したがって、戦争描写は変容後に対する説明的機能を持ち、変容に関わる「きっかけ・原因」として変容と因果関係がみられる。

以上の変容と「きっかけ・原因」の因果関係についてを図式化すると図2のようなになる。

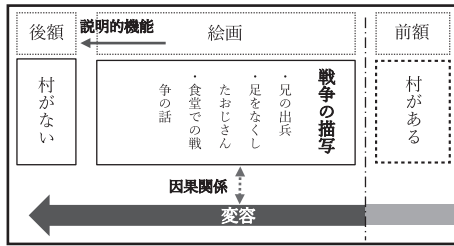


図2 変容と「きっかけ・原因」の因果関係

4.2 額縁構造として捉える  
物語末部の段落の時に注目したとき、「今はもうありません」と村の現状が述べられていることから、この段落は現在時

制であることがわかる。また、村は「その年の冬」にあった戦争で破壊されたことから、それ以前に述べられているヤモの一日はその年の夏の出来事と考えられ、過去時制の内容であると思われる。すなわち、額縁構造として「世界一美しいぼくの村」を捉えた際、村の現状部分を書かれた段落が「額縁」、ヤモの一日は「絵画」に相当する部分である。加えて、この物語は「過去」と「現在」との時間の反復は見られるが絵画の前の額縁部分に相当する「現在時制」が存在しない。したがって、「世界一美しいぼくの村」は、額縁構造ではあるが、後型と呼びならわされている片額構造である（以下後額構造とする）。これを図式化すると図3のようになる。

額縁構造において「前額」と「後額」を比較した際、物語の意味的に大きな変容がある。しかし、「世界一美しいぼくの村」は後額構造であるため「変容前」がなく、後額の「変容後」と「絵画」に書かれている変容の「きっかけ・原因」から「変容」を推測しなければならない。

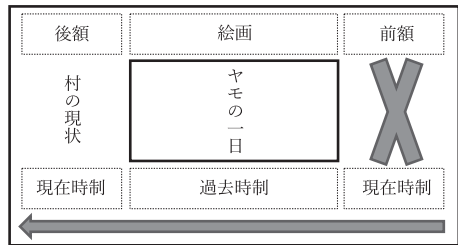


図3 世界一美しいぼくの村「後額構造」

#### 4. 3 後額構造がもたらす読み手への効果

「世界一美しいほくの村」を額縁構造として捉え内容を理解することを踏まえて、額縁構造がもたらす読み手への効果について考察する。

初めて「世界一美しいほくの村」を読む際、後額構造と知らないため、読み手はヤモの一日を前額として認識する。これは、地の文がヤモの視点で展開され、現在時制として捉えるためである。前額は物語の意味的変容の変容前の姿を示すため、読み手は「前額の内容が絵画、後額と読み進めるにあたりどのように変容するのか」と考えながら読む。ヤモの一日は、度々、戦争が起きている描写があり、ヤモが不安を感じる心理描写がなされる。それと同時に一日の最後には子羊を買い、世界一美しい村に帰ってきた幸せなヤモの描写がなされている。この描写は物語の中で最もプラスの度合いが高い場面であるといえる。ここで読み手は、「幸せな状態がどのように変容するのか」という疑問を持つ。しかし、その後、ヤモの村は戦争ですでになくなってしまっていることが明らかにする。読み手は、初めてヤモの一日は過去時制の話であり、絵画であることがわかる。前額だと思っていた内容が絵画であり過去だったという、読み手の想定が裏切られることで強い印象を受ける。また、自身の村が世界一美しいと思っているプラスの場面から、美しい村がなくなってしまうという大きなマイナスを感じさせる場面の転調からも強く印象に残る。

#### 5 「桃花片」…両額構造

##### 5. 1 内容的特徴

「桃花片」は、三部構成になっている。物語は仕事場でろくろを回す六十歳の楊の姿から始まる。これを第一部とする。ここでは、楊は満足したつばや皿を作ることができていない。第二部では楊の過去の話へと遡る。父親の仕事を観察し手伝っていた幼い頃から、ろくろを自由に回せるようになり父親から陶工について学び始めた若者までを描く。しかし、楊は最後まで満足していく作品を作ることは叶わなかった。第三部では再び六十歳の年老いた楊の場面へと戻ってくる。ある日、楊は名器とうわさされた桃花片の水滴に出会い、それは自身が追い求めていた陶工の姿であり父親の作品であったことを知る。

第一部で、楊は「自身が満足できる陶磁器」がどのようなものか悩んでいる。第三部では、楊自身が理想とする陶磁器は父親の作品そのものであったことがわかる。この三部構成の第一部と第三部から、「楊自身の理想の陶磁器を発見できたこと」が物語の意味的に大きな変容と読み取ることができる。

第二部では、楊と父親との陶磁器に対する考え方が異なっていることが描かれている。楊の父親は普段使う陶磁器に限りない愛情を注いでいたことがわかるが、幼い頃から楊は鑑賞できるほどの焼き物であることが本当の値打ちと考えている。楊の作品は父親に「豊かさ」や「なごやかさ」とは程遠いと評され、楊は「職人のくせに」と反発していた。桃花片を構成する三部を時系列に並べるならば、「第一部―第一部―第三部」となる。そのため、第一部の楊は、幼い頃から変わらず鑑賞品としての

焼き物を重視していることがわかる。第三部で、楊は自身の理想とする陶磁器がわからないまま、素晴らしいというわさになった桃花片の水滴を見に行き、その水滴について、次のように感じている。

楊は、身も心も吸い込まれたまま、時のたつのも忘れて立ちつくした。この小さな一つの水滴にこめられた、陶工の命——たましい——に、はだで触れた思いであった。

楊が水滴に対し深い感銘を受けたことは二文から読み取れるが、最後まで「楊自身の理想の陶磁器」がどのようなものであったのか言及はされなかった。しかし、第二部に楊と父親との陶磁器に対する考え方の相違が書かれていることで、楊の理想とする陶磁器とは、父親が考えるように「豊かさ」や「なごやかさ」を感じられる日常的な陶磁器であることを読み取ることができる。したがって、第二部には物語の意味的に大きな変容に関わるきっかけ・原因が述べられ、説明的機能を持つといえる。第一部、第二部、第三部の内容的特徴の関係性について図4に示す。

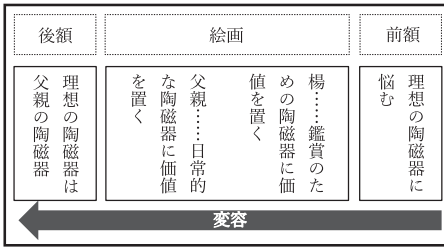


図4 内容的特徴の関係性

## 5. 2 額縁構造として捉える

「桃花片」では、時制に注目すると「現在—過去—現在」という時制の変化が描かれている。ひとつ目の「現在時制」は、仕事場でろくろを回す六十歳の楊の姿から過去時制の回想にく手前までである。これは、額縁構造の額縁部分であり、「前額」と呼ぶことができる。ふたつ目の「現在時制」は、過去の回想から戻り、楊の父親が死んだことが書かれている段落から桃花片の水滴を見る終末部までのすべてである。これを、額縁構造の額縁部分であり「後額」と呼ぶ。そして、楊の幼い頃から父親に陶工の技術について学ぶ過去時制の回想部分は「絵画」と呼ばれる部分に該当する。桃花片は、「前額」と「後額」がそろうているため、変容前と変容後が描かれており、物語の意味的に大きな変容をつかみやすい構造になっている。また、絵画の部分には先に述べたように、変容部分について読み取るための「きっかけ・原因」が描かれている。つまり、「桃花片」は「前額—絵画—後額」と三部構造になっている、変容を読み取りやすい両額構造と呼ばれる額縁構造である。これを図式化すると図5のようになる。

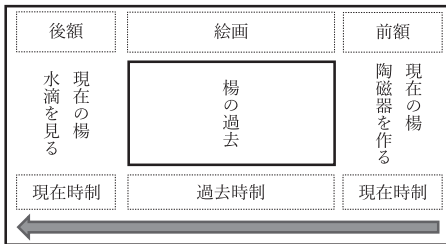


図5 桃花片「両額構造」



## 6 考察

今までの額縁構造の特徴と額縁構造を用いた物語の内容的特徴についてまとめると、まず、額縁構造の特徴としては、額縁構造は基本的に三部構成であり、時制の変化がある。前額と後額の額縁は現在時制にあたり、絵画は過去時制にあたるものが挙げられている。つぎに、額縁構造を用いた物語の内容的特徴についてである。前額から後額にかけて物語の内容的に大きな変容があり、後額構造では後額しかないが、変容後がわかるため変容前を推測することで物語の意味的に大きな変容を推測することができる。絵画には、この変容の「きっかけ・原因」となる要素がちりばめられているため、絵画と変容は因果関係を持つといえる。

本研究では、この特徴を前提として、先行研究で明らかにされてこなかった額縁構造のジャンル特有のポイントとは何かを、明らかにすることを目的としている。そのため、額縁構造を含む教材である「世界一美しいぼくの村」と「桃花片」から、額縁構造の持つ特有のポイントについて考察する。また、それらの額縁構造のポイントが、授業構成上、作品読解の視点としてどのように有効に機能するかを考察する。

「世界一美しいぼくの村」には、最後の一文によって表面化する仕掛けが二つ存在する。ひとつは、物語の大きな転調である。物語冒頭では、アフガニスタンという国の美しさや様々な果物が実るなど豊かさが描写されている。そのあとの場面では、ヤモが市場で果物を売り、パグマンの村の誰も持っていないほど綺麗な子羊を買い、村に帰ってくるというヤモの幸せな一日

が描写されている。すなわち、物語のほとんどを使い、プラスな印象を読み手に与えるような文章の構成になっている。加えて、「世界一美しいぼくの村」という題名も物語にプラスな印象を持たせることへ関係しているといえる。しかし、最後の一文で、世界一美しい村がすでになくなっていくとわかる。ことで、プラスの印象である村やヤモの日常、美しい国が戦争によって失われ、マイナスの印象へと変化する。このプラスからマイナスへの大きな転調によって、読み手は物語に大きな落差を感じ、最後の一文を印象的に感じる。ふたつめは、「世界一美しいぼくの村」の時制である。初めて作品を読んだ際、ヤモの一日はヤモの視点から現在時制で展開されるため、読み手は現在の出来事と考え読み進める。しかし、最後の一文で「その年の冬、村は戦争ではかいされ、今はもうありません」とあることで、現在ではなく過去の出来事だと理解できる。加えて、時制が明確になることで、「世界一美しいぼくの村」は「過去―現在」の構成であり、前額が欠けた片額縁構造の額縁構造だとわかる。初見ではわからない時制と片額縁構造という潜在的伏線は、最後の一文を読むことで表面化する。最後まで読むことで表面化する潜在的伏線は物語を読み深める上で、読み手に「そういうことだったのか」という謎解きの感覚を与える。転調と時制によって表面化した謎解きは、読み手が読み返すにあたり、印象的に感じさせ、最後の一文への注目を促したり、絵画部分にあたるヤモの一日に含まれる幾度かの戦争描写が結末へ繋がることに気づかせたり、読み手の作品への読み深めを助けるといえる。

「桃花片」では、楊は若い頃から老齢になるまでの間、「理想

の陶磁器とは何か」という疑問を持ち続けている。過去の回想である絵画部分で、幼い楊は父親が懸命に焼いた陶磁器に対し「もっと、いいものかと思った。」と述べ、「どうして、お父さんは、ふだん使うような焼き物ばかり焼いて……、それで満足しているんだらう」と不思議に感じている。加えて、陶磁器を作るようになる父親の作る日常的な陶磁器には満足できず、「だからお父さんは、たいしたものを残すことができないんだ」と父親の陶磁器を否定的に捉える。それから楊は「鑑賞のため陶磁器」に価値を置くようになり一時期は名人の称号を得て満足したが、その陶磁器が自身の追い求める陶磁器なのか疑問を感じ、六十を過ぎて苦心しながら陶磁器を作り続けた。苦心している楊の姿を通して、読み手は楊が追い求める「理想の陶磁器とは何か」と疑問を持つ。その疑問は、素晴らしい出来である桃花片の水滴の裏の父親の刻印を発見することで解消される。楊が父親の作品である水滴に対して時がたつのも忘れ立ち尽くしてしまうほど感動しているという描写から、楊の「理想の陶磁器」とは「桃花片の水滴」であり、父親の刻印から「理想の陶磁器」は「父親がつくる日常的な陶磁器」だったことがわかる。これは、読み手の疑問の解消につながる。したがって、「桃花片」も後額にかけて読み手に疑問を持たせ、後額でその疑問が解消されるという謎解きが含まれた構造となっている。また、老齢になるまで探し続けた「理想的な陶磁器」という謎が、長年否定し続けた「父親の陶磁器」であったことがわかり、最後に楊は大きな衝撃を受ける。ここまでの間で父親から認められず自身の陶磁器作りに苦心している楊の姿は強いマイナスの

印象を読み手に与える。しかし、謎解きによって悩みが解消され、物語はプラスな印象へと大きく変わる。これは、読み手に大きな落差を感じさせ、物語に大きな転調を作る。結末を読むまで、父親の陶磁器の描写や楊の陶磁器への考え方という理想の陶磁器につながるかわからない潜在的伏線が、謎解き要素と謎の解消による転調によって表面化し、読み手に注目させる効果を担うと考えられる。これは読み深めの際、読み手に対し、「物語にどのような疑問を持ったか」という謎解きを導人に授業を展開させることで、「理想の陶磁器の理解」という物語の意味的に大きな変容を認識させることにつながるといえる。

二つの物語教材から、額縁構造には特有のポイントが新たに二つあると考察できる。ひとつは、絵画には読み手が作品の行く末に疑問を持つ仕掛けがあり、その疑問は後額で解消されるという謎解きである。もうひとつは、絵画から後額にかけてある大きな転調である。この転調はマイナスな印象からプラスな印象への転調と、プラスからマイナスへの転調どちらも含まれる。前型の額縁構造（以下前額構造とする）では、変容前のみのため変容後を絵画をもとに推察する必要がある。読み手が絵画をもとに疑問を感じたとしても、その疑問を解消する後額が欠けていることから謎解きは不十分であるといえる。加えて、絵画から後額にかけて起こる物語の転調もない。そのため、本研究の新たな二つの額縁構造の特有のポイントは、前額構造を含めない狭義の額縁構造の条件と考察できる。また、狭義の額縁構造の条件は、額縁構造の持つ物語の意味的に大きな変容の読み取りや絵画にある変容の「きっかけ・原因」となる要素の

読み取りに役立てられ、読み深めの手立てとなるといえる。したがって、授業を行う上で手立てのひとつとして、狭義の額縁構造の条件は活用できると考える。

今後の研究として、実際の授業で、狭義の額縁構造の条件が作品読解の視点として考察どおり有効に機能するか、具体的にどのような効果を発揮するのかを確認する必要がある。また、中学校で扱われる額縁構造を用いた物語教材にまで分析範囲を広げ、小学校物語教材に用いられる額縁構造や仕掛けと、中学校物語教材における額縁構造や仕掛けの相違について検討する。それらの結果から、授業の構成を提案、検討し、実践することを通して研究していきたい。

#### 引用文献一覧

- 甲斐睦朗 (1989) 『わらぐつの中の神様』の表現—キーワードに着目して—『実践国語研究別冊 No.92』文学教材の研究と授業
- ⑨ 杉きみ子「わらぐつの中の神様」の教材研究と全授業記録」全国国語教育実践研究会編明治図書 pp.21-22
- 安藤修平 (2015) 『Ⅲ文学的な文章・詩の指導に役立つ用語解説』『小学校国語「読むこと」の授業を作る—文学的な文章編』高木まつき監修 光村図書 p.179
- 須貝千里 (2001) 『二枚の青い幻燈』と「私の幻燈」の間で—「やまなし」の跳躍—『文学の力×教材の力 小学校編 6年』田中実・須貝千里編 教育出版 p.28
- 倉井伸太郎 (2018) 『額縁構造をもつ文学的教材の指導方法の開発に

関する研究』上越教育大学国語研究／上越教育大学国語教育学会編 pp.67-80

Gerard Genette (1972) / 花輪光・和泉涼一訳 (1985) 『物語のデイ スカール—方法論の試み—』書肆風の薔薇 p.17

小林豊 (2020) 『世界一美しいほくの村』『新しい国語 四下』秋田

喜代美ほか一〇六名 pp.11-122

岡野薫子 (2015) 『桃花片』『新編 新しい国語 六』小森茂ほか三十名 pp.224-235

(学校教育研究科教育実践高度化専攻)